

勝原先生のこと

中 嶋 真 也

勝原晴希先生は、一九九四年四月駒澤大学文学部国文学科に着任された。近現代の詩歌を専門とされ、多くの学生を指導し、また学科内のさまざまな難局を明晰に解決してくれる先生であった。二〇二二年三月、定年まで後一年あるが、早期退職されることになった。新型コロナウイルスの蔓延を経て、価値観も変化し、ご家庭を常々大切にされている先生でもあり、いろいろお考えがあるのは承知の上だが、残念でならないというのが正直なところである。

私が二〇〇四年四月に駒澤大学に就職した時、勝原先生は学科主任であられた。先生は着任されて十年ということになるが、当時の私の印象は、勝原先生が国文学科の司令塔であり、駒澤大学文学部国文学科は勝原先生の学科だというものであった。御大とでもいうべき学科の象徴のような先生方がある面自由に振る舞えるのも、勝原先生が、学科を、構成員を十二分に掌握していたからに拠るのであろうと思われた。通常、学科主任の先生は外れるような仕事も先生はされていて、後々考えてみても、ありえないスキル発動であった。

先生は、どのような面倒な局面でも笑顔を絶やさずに取り組まれていた。常々穏やかな口調ではあるが、書類を果

てまで見通し、簡潔な説明で鋭さは十分に伝わるものであった。先生が、会議の場で本当に怒った口調になったのは、私の記憶では一回しかない。

学科構成員のバランスから、先生は学科主任を二度お務めになった。二度目は二〇一七・二〇一八年度と最近のことである。先生は前々から、主任不在期の可能性を危惧されていた。うやむやになりそうな時に、その問題を会議の場でお話になり、自らが主任再登板することで回避した。ただただ驚いた。誰も反対はなかったが、学科運営は極めてスムーズになった。

*

*

*

先生の授業そのものを拝聴したことは残念ながらもなかったが、オープンキャンパスではよくコンビとなり、高校生向けの模擬授業という形で、授業のダイジェスト版を聞かせていただけた。詩を読み、その詩人の生涯をたどり、散らかっているようにも見える飛躍のある表現を易しい口調でまとめていくスタイルは、日本古代の韻文を扱う私から見ても、あこがれるものであった。高度でありながら、平易な印象を与える感じである。

授業関連で思い起こされるのは、勝原先生の演習生のことである。よくも悪くも個性的なメンバーが揃うことが多々あった。私が一年生の必修科目で、不可を付けた学生ばかり集まっているのではないか？と思わされる年もあった。先生の凄みは、そういった学生も受け止め、そして、ほとんどの学生が留年することなく、四年で普通に笑顔を浮かべて卒業していくところに表れていた。いくつも単位が取得できないと、ついつい大学は遠のく存在になるが、そのような学生も大学へ来たくなるオーラが先生からはあふれ出ているのであろう。

個別の名を記すのは避けるが、日本一を競える位置になった芸人も、学校教育の現場では触れないような楽器を腕で披露するミュージシャンも、在学中に日本一になったダンサーも、勝原先生の演習出身者である。個性を束ね、その能力を抑え込まないのも先生の魅力なのであろう。

*

*

*

先生のことをふりかえると、本当にいろいろなエピソードが鮮やかに思い浮かぶ。穏やかなあの声とともに。以前、私が組合執行委員の際、遅くまで大学に残らざるを得なかったときに遭遇し、闇に取り込まれそうな状況で「大変です」と申し上げたら、先生は「明けない夜はないですよ」と笑顔でおっしゃってくれた。あたりまえのことなのだが、深く染み渡った。先生のご退職後、国文学科の混迷は多々生じてしまう気がしてならないが、「明けない夜はない」という文言をかみしめながら、進んでいきたいと思っている。

これからの先生のますますのご活躍を願い、そしてたまには駒澤大学、国文学科に顔を出していただければと思っています。